

礼拝プログラム ※主の導きにより変わる事があります

- 黙祷 …………… 御言葉に耳を傾け、心を主に向けましょう。2テモ 2:1-9
- *賛美 …………… 340番
- *交読文 …………… 36番
- *使徒信条 …………… 会衆一同
- *頌栄 …………… 107番
- 礼拝のための祈り ……… 川合ゆきえ姉妹
- 賛美 …………… 383番
- 聖餐式…………… 281番
- メッセージ …………… つながれていない神のことば(使徒 16:16-34)
- 御言葉を適用する祈り … 会衆一同
- 賛美 …………… 394番
- 献金感謝の祈り ……… パスター
- 報告と歓迎 ……………
- *主の祈り …………… 会衆一同
- *祝祷 …………… パスター

祈祷課題

- ・この教会が神の御声を聞いて御心を行う教会となるように
- ・病、貧しさ、悲しみの内にある兄弟姉妹のために
- ・兄弟姉妹達がキリストの香りを豊かに世に放ち、仕事、事業が祝福されるように
- ・主に忠実で御霊に満ちた奉仕者が70名与えられるように
- ・終末の災いに実際に直面している兄弟姉妹の守りのために

祝福の御言葉(下線にご自身のお名前を入れて宣言して下さい)

起きよ、光を放て。_____の光が臨み、主の栄光が_____の上へのぼったから。見よ、暗きは地をおおい、闇は諸々の民を覆う。しかし、_____の上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光が_____の上にあられる。諸々の国は、_____の光に来、もろもろの王は、のぼる_____の輝きに来る。目をあげて見ませ、彼らはみな集まって来る。_____の子らは遠くから来、_____の娘らは、かいなにいだかれて来る。その時_____は見て、喜びに輝き、_____の心はどよめき、かつ喜ぶ。海の富が移って_____に来、もろもろの国の宝が、_____に来るからである。多くのらくだ、ミデアンおよびエパの若きらくだは_____を覆い、シバの人々はみな黄金、乳香を携えてきて、主の誉を宣べ伝える。(イザヤ 60:1-6)

パウロ達は、遠い道のりをさ迷った挙句、やっとピリピへと導かれ、そこでささやかな人数のいのちの刈り取りがあって、ほっとしたのも束の間、現地の人達に訴えられ、鞭打たれ、牢屋に入れられてしまった。なぜ告訴人達は、パウロ達を訴えたのか。それは、もうける望みが無くなったから(19節)、すなわち、彼らの奴隷である占い女から、占いの霊を追い出したためである。女は占いの霊に縛られ、占いで得たお金は、霊障のリスクを負わない主人たちに搾取される状態だった。パウロの取った行動は彼女にとっては救いだったが、彼女の上司達のビジネスには損失であった。今の時代でも、多くの日本人達が、時代の霊に引きずり回され、働いても働いても主人たちに中間マージンを搾取され、子育てやマイホーム資金もままならない人達が多いが、もし彼らが、主人たちが強いる労働を止め、彼らしい生き方をするようになりだすとしたら、その主人たちには当然、望ましくない事である。福音が伝わる所には自由があり、奴隷開放があるが、それが気に食わないという人達もあり、彼らが宣教者たちを迫害したり殺したり、奴隷にまつわり戦争を起こしたりするのは、歴史で見てきた通りである。

「それで二人に何度もむちを加えさせた後、獄に入れ、獄吏にしっかり番をするようにと命じた。」(23節) もし私達も、もし、いのちのために起こした行動が災いで返って来てしまったら、何を思うだろう。パウロは幾度も鞭打ちや牢獄、迫害に遭ったのに、それでもなぜ福音を伝えるのを止めなかったのか？ それは、無理してヤル気を喚起したからではなく、福音そのものには圧倒的ないのちの力があり、死はいのちに、病は健やかに、貧しさは豊かさに、取って替えられるからである。福音ほど「オトク」な話は世のどこにも無く、伝えなければ災いだとさえ思える程、良き知らせだからである。

「真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいていた。」(25節) この25節以降、なぜそうなるのか？と問いたくなるような事ばかりが続く。なぜ打ち傷だらけで鎖に繋がれているのに、賛美を歌えるのか。なぜ悪人達が閉じ込められている獄舎で夜中に賛美しても、誰も文句も言わず聞き入るのか。なぜ賛美すると地震が起き、皆の鎖が解けるのか。そして、鎖が解けて扉が開いたのに、なぜ逃げた人が一人もいなかったのか。また、なぜ看守は自殺しようとし、看守はなぜ、つい先まで自分が見張っていた囚人パウロにひれ伏し「先生がた・・・」と言うのだろう。恐らくパウロ達は地震まで、囚人たちが一晩で変化するような行動を、起こしていたのではなからうか。すなわちパウロ達は、ぶち込まれた牢屋で、看守長にも聞こえるように福音を伝えていたのではなからうか。イエス様はどんなお方で、信じた者がこんなに救われ、自分達もイエス様にどんなに守られて来たのかを。賛美は邪悪な者にはノイズだが、救われた者には、どんなノイズのような賛美でも、心揺さぶられる。賛美の内に地震が起り、鎖も解けてしまった。普通の悪人なら、ここぞとばかりに逃げるはずなのに、一人も逃げなかった、という事は、既に牢屋の皆は、圧倒的な主の力と愛に打たれていたのではなからうか。

「パウロは大声で、「自害してはいけぬ。私たちはみなここにいる。」と叫んだ。」(28節) 当時のローマの法律では、囚人が逃げてしまった場合、看守はその囚人の罰を受けなくてはならない、という決まりがあった。だから、囚人が全て逃げてしまったと思った時、絶望して自殺しようとしたのだ。彼は牢獄を見張っていたようで、実は、ローマの制度という牢獄に縛られていたのだ。現代も当時と変わる事なく、空中の権威を持つ支配者達によって学校や会社、家庭も搾取され、縛られ、どうあがいても幸せになれない「見えない牢獄」にあえいで、自殺しようとしている人も、沢山いる。福音は、有形無形の監獄にいる人を全て、救いへと導く。パウロが獄中に居ながらにして、獄の中をいのちに満たしたように、私達も、救いの御言葉を伝える事によって、有形無形の牢獄に居ながらにして、そこをいのちで満たす働きが出来るのだ。それは永遠の栄誉をもたらす、いのちの務めであり、それだからパウロは、福音伝道が止められないのだ。獄から出るのが救いではない。イエス様こそ、獄や鞭、死さえも、決して無効には出来ない救いである。イエス様を知れば知る程、伝えたくて仕方なり、たとい伝えなくても、普段の趣が、イエス様を証してしまう。現代日本の全て監獄に囚われている人達を、一人でも多くイエスへと救い出す皆さんでありますように！

